

[課程— 2]

審査の結果の要旨

横山由香里

本研究は、トゥレット症候群を有する青壮年者を対象に、①健康関連 QOL と Life satisfaction を評価指標とする定量的な研究を行った後、②他者との関係性を中心とする社会生活上の困難について定性的な研究を行い、患者の困難とニーズを明らかにしたものである。主たる結果は以下の通りである。

定量的な研究では、次の 3 点が示された。

- 1) 対象者の健康関連 QOL は、「身体機能」、「体の痛み」を除く多領域で同世代の国民標準値より低い水準にあった。
- 2) 対象者の 95.2% がからかい・誤解による不快な経験をしており、他者との関係性において困難が生じる可能性が推察された。
- 3) チックが重症な者、ADHD の症状がある者では健康関連 QOL や Life satisfaction が、不良である可能性が推察され、チック症状や併存症に着眼することの重要性が再確認された。また、就学・就労状況、差別不安・遠慮による行動の自主規制、情緒的サポートは健康関連 QOL や Life satisfaction と関連性を有していたことから、社会生活場面における他者との関係性に着目することが重要と考えられた。

定性的な研究では次の 3 点が示された。

- 4) チック症状が生じることによって生じる痛みや疲れ、日常生活機能の低下、怒りや自傷への衝動といった《制御できない衝動によってもたらされる負担》と、症状の経過の不確実性やわが子に遺伝することへの不安といった《トゥレット症候群に関する将来不安》が生じていた。
- 5) 協力者は、他者から否定的な反応をされる経験を度々経験しており、《度重なる他者の否定的反応》に伴って、《耐えがたい思い》を感じていた。そうした経験によって、協力者は他者の否定的な反応を想定し、それを避けるためにさ

さまざまな活動を自主規制するようになっていた。《他者の否定的な反応を想定した行動の自主規制》は、他者の否定的な反応を減じる一方で、さまざまな《規制による不利益》を生み出していた。

- 6) 協力者は、社会や医療従事者、職域、学校などでの《認知度の向上》や、《医療体制の改善》を望んでいた。また、患者の心理的側面に着目した支援、支援の対象や手段の拡充といった《支援の在り方への要望》が期待されていた。

本論文では定量的な研究と定性的な研究を組み合わせる **Mixed Method** を用いたことによって、チック症状の重症度や併存症の負担だけでなく他者との関係性における困難の諸相が明らかとなった。小児を対象とした研究は散見されるものの、青壮年者を対象とした研究がほとんど行われていない中、これまで支援の後手に回ってきた青壮年者の困難やニーズが示唆された点で、患者理解に貢献する実証研究と考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。